

随想

日本のGDPは二〇位

モノづくりが得意なわが国は何を考えるべきか

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

府が発表した日本の二〇一五年度の一人当たりGDPはドル換算で、三万四、五二二ドルで経済協力開発機構(OECD)加盟五ヶ国の中で二〇位だったと発表した。二〇一四年に对比しての円安が進んだことによる。円ベースでは四一七万八、〇〇〇円で三・四%伸びたが、ドルベースでは九・六%減でこれが大きく影響した、という。

OECD加盟国でトップはルクセンブルクの九万九、九〇〇ドル、アメリカは五万六、一〇〇ドルの五位、イギリスは四万三、九〇〇ドルで一位、韓国は二万七、一〇〇ドルの二三位であった。日本のGDP総額は四兆三、八三六億ドルで、世界全体の五・六

%、順位は三位。アメリカは一億三六六億ドルでトップ。中国は一兆七七億ドルで二位だった(平成二十八年十二月二十五日 東京新聞朝刊、七面)。リストで日本までの順位と人口を確認すると、ルクセンブルク(五七・六万)、スイス(八七・〇万)、ノルウェー(五一・三万)、デンマーク(一〇・九万)、アイルランド(五九・三万)、アメリカ(三億一、六九四万)、デンマーク(七〇・七万)、オーストラリア(一四二四万)、アイスランド(三一・九万)、スウェーデン(九五九・六万)、オランダ(一、六四八万)、イギリス(六、三一八万)、オーストリア(八三六・四万)、カナダ(三、四二三万)、フィンランド(五三二・六万)、

ドイツ(八、一〇八万)、ベルギー(一、一二二万)、フランス(六、二八一万)、ニュージーランド(四四四・五万)、イスラエル(八一五・七万)、日本(一億二、七一一万)である。

一人当たりGDPが大きな国で、人口が五、〇〇〇万人を超えるのは、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスのみで一人当たりGDPが五万ドルを超えている。北欧諸国やスイスで高額であるが、そもそも人口が少ない国は、まとめやすい事情がある。そ

うはいつても、日本のそれは二

ユージーランド、フランスやイ

スラエルと肩を並べている。日

本の二〇一五年の失業率は三・

三七%で、フランスの一〇・三

ドイツ(八、一〇八万)、ベルギー(一、一二二万)、フランス(六、二八一万)、ニュージーランドやイスラエルに比べても相当低い。GDP上位のルクセンブルクでは失業率が六・八六%、アイルランドで九・四五%とわが国に比べて二倍以上も上の(スイス三・一八%、ノルウェー四・三七%等、

失業率にはばらつきがある)。

世界第三位のGDPを誇り、

日本(GDPがつい最近まで

失業率三・三七%の日本を個人

レベルで見ると二〇位であるこ

とは、意外な印象を受ける。

日本(GDPも世界

世界第二位で、一〇%を超えていたころ、個人のGDPも世界

思は、いつの間にか個人GDP

は二〇位になっている。これ

が所得格差の影響であれば、欧

八%はともかく五・二%台の二ユージーランドやイスラエルに比べても相当低い。GDP上位のルクセンブルクでは失業率が六・八六%、アイルランドで九・四五%とわが国に比べて二倍以上も上の(スイス三・一八%、ノルウェー四・三七%等、失業率にはばらつきがある)。世界第三位のGDPを誇り、日本(GDPがつい最近まで失業率三・三七%の日本を個人レベルで見ると二〇位であることは、意外な印象を受ける。日本(GDPも世界世界第二位で、一〇%を超えていたころ、個人のGDPも世界思は、いつの間にか個人GDPは二〇位になっている。これが所得格差の影響であれば、欧

米経済型に移行した結果なのかかもしれない。

現在のパートタイム一時給は関東の過疎エリアでも、八五〇円を超えている。本日、研究所への道すがら中規模採卵養鶏場に立ち寄った。丁度今日、男性が一名退職したこと。基本的に人手不足で稼働するのが常である現場はテンヤワソニヤであった。年末もあり、募集をかけても応募すらない、と嘆いておられた。

中小の採卵養鶏現場で、最もひつ迫するのは鶏糞処理担当であり、汚れ仕事をいとわず働いても経済的な評価が十分ではない。やつと確保したかなり老年の労働者(六五～六八歳)でも、現場でなじむまでにギブアップするケースにまま遭遇する。

著者が鶏糞発酵に興味を持つたのは四〇数年以上前の創業時であつたが、なにぶん鶏糞発酵は不確定要素が多い。うかつに手掛けると、他のことが何もで

きなくなる。そう感じて、あえて手を出さずにきた。本格的に発酵メカニズムを勉強しようと心したのは、東日本大震災直後で、それから足掛け五年になる。手掛けみて、ファジーで、アナログで計算どおりいかない。そこが面白い。四経営体のコンポスト製品を使用した作柄比較は今年で四年目。あえてコーンとナスを盆前に、白菜とキヤベツを秋から年末にかけて、連作で栽培している。それぞれの肥料にはそれぞれなりの個性があり、作柄や味にも微妙な差がある。官能検査結果を自分の味覚と対比すると、農業の面白さが肌で感じられる。こんな面白い産業が、低所得であること自体が不審であるが、改めてモノづくりと金づくりは異なることを実感させられる。

モノを生産するのと、モノを金に替えるのは異なった次元にある。マニュファクチャ―以来生産工程が機械化され、大量生産が容易になつた。規格製品を大量かつ安価にできる時代で

ある。ゼロサム化した現代には流通が大きく利潤を損なうことになる。農生産物も然り。流通を考慮しない生産には大きな利益を望めない時代となつてゐるのである。

先のデータでデンマークや芬蘭ランドがGDP上位を占めている。これらの国は人口で見る限り小国で、決してモノづくりで稼いでいるように見えない。一昨年、デンマークのコペンハーゲン大学の教授・アンドリュー・ボヤーセン博士が家族連れで来日された。彼は、五〇歳すぎの新進気鋭研究者でマンヘミア(かつてはパストレラに分類されていた)のオーソリティである。その彼がおよそ二週間のスケジュールで日本に滞在。サークルチケットや格安ツアーをインターネットで予約して来日し、ターネットで予約して来日し、家族一同で縦横無尽に日本中を動き回った(それこそ神出鬼没である)。その夏二度目の家族での海外旅行という。全体では優に一ヶ月を超える休暇を満喫していることになる。

フィンランドに、知り合いの知り合いがいる。生活保護を受けているが、まだ三〇歳台半ばで生活保護を受け始めた。毎日日曜大工をしている。そうでもない。社会給付を受けることなども抵抗を感じていないようだ。生活ぶりを見聞きすると、わが国とは何か違うと感じてしまう。北欧の諸国では税金が高い。四〇〇万円程度の年収でも四〇%近いと聞いた。とても目前で車を買えない。カローラクラシックの車をお隣さんとカーシェアしている。加えて、消費税も高い(食品等は安いが、コーヒーшибップでホットドッグとコーヒーをオーダーすると、一人で五百〇〇～三、〇〇〇円ほど取られる)。しかし、このような税率と可処分所得について、先のボヤーセン教授は不満を感じるといふ。

モノづくりが得意なわが国は、諸国と伍せずに張り合つたために何を考えるべきか、つくづく考えさせられる。GDP情報であつた。

(65) 鶏の研究 <2017> 第92巻・第2号